

## 「読む力」をつける国語科2年生「スイミー」の授業実践

伊藤 敦子 (小牧市立大城小学校)

### 1. 子どもたちの実態

本実践の対象となる2年生児童5名は、ブラジル人3名とボリビア人1名とペルー人1名で、全員日本生まれである。そのため、日常会話には困らないが、DLAを実施すると、「話す」では日本語も母国語も語彙が少なく認知力が弱い。そのため、授業を理解できるレベルには達していない子どもが多い。しかし、体験したことは理解しやすく視覚的な支援が有効であることが分かった。

### 2. 実践の概要

#### 2. 1 授業の目標と単元構成

この子どもたちは、日本語適応指導教室(ANIMO)で、国語の時間を全部取り出して国語科の指導を行っているが、日本語と母語のレベル差がある。そこで、本単元「スイミー」ではレベル差のある子どもたちが、それを生かし学べるために、JSLカリキュラムを取り入れ、以下の目標を設定した。

#### 国語科の目標

①主人公の行動や会話から、気持ちを考える。

②主人公について考えたことを書く。

#### 日本語の目標

①比喩表現について理解する。

②自分の考えを表現するのに必要な言葉を使って話す。

③気持ちを表す言葉を使って話したり書いたりする。

また、子どもたちの日本語レベルに合わせて、

単元構成は次のように編成しなおした。

＜スイミーの単元構成＞9時間完了

第1次 全文を音読。漢字の学習。

第2次 スイミーがどんな魚か考える。

第3次 マグロがつっこんできたときのスイミーの気持ちを考える。

第4次 だんだん元気になるスイミーの気持ちを考える。

第5次 スイミーがマグロを追い出すために考えたことを読む。

第6次 スイミーが仲間に教えたことを読む。

第7時 感想文の下書きメモを書く。

第8時 メモをもとに感想文を書く。

第9時 比喩について学習する。

#### 2. 2 授業の工夫

授業は、DLAから分かった「視覚的な支援」や動作化を取り入れて行った。

まず、友達の音読速度に合わせて文をなぞれる文字の大きな自主教科書。子どもたちは音読速度が遅いため、教科書の文字をなぞって読もうとすると、ずれてしまうことが多い。また、友達が音読するときにはどこを読んでいるのか、指でなぞるように指導しているが文字が教科書のサイズだとずれてしまい、どこを読んでいるのかわからなくなってしまう。そこで、文字のサイズを大きくしてなぞりやすくした。もう一つの工夫は、教科書に主人公の行動について自分が考えたことを書き込める吹き出しが書き加えてあることである。吹き出しには、子ども一人一人の顔写真を張って、書く意欲を高めるようにした。子どもたちは、教科書に自分の顔が載っているのを

見ると「わあ、ぼくの写真だ！ここに書くんだね。」「お手紙にしてもいい。」と声をあげ、早く書きたくてうずうずしていた。

また、主人公の気持ちや様子を理解するうえで必要な言葉を、視覚的に分からせる「言葉絵カード」を作成して言葉の意味を視覚的にとらえさせた。さらに、主人公のおかれた状況や場面の移り変わりを読み取る時には「場面絵」を活用した。

そして、登場人物の行動を動作化することにより、主人公の行動や気持ちを読み取ることに迫った。

最後に、この教材で多く記述される比喻表現については、表現方法を理解するためのワークシートを特別に作成して学習した。主人公のスイミーがだんだん元気をとりもどしていく様子や気持ちが、このような日本語の表現方法を学ぶことで、より理解しやすくなった。

このように、主人公の行動や様子から気持ちが考えられるような工夫を取り入れるとともに、1時間ごとの授業の流れは、場面が変わっても同じにして、スムーズに学習活動に取り組めるようにした。

さらに、ワークシートは、子どもたちが見るだけで、1時間の学習の流れや主人公の様子や気持ちが理解できるように作成した。

例えば、会話文には色をつけて区別し、だれが話したのか目で見て分かるようにした。その他にも顔の表情イラストを活用して、子どもたちが視覚的に気持ちの変化を理解できるようなワークシートをめざした。

## 2. 2 授業の実際

ここでは、単元構成の5・6時間目にあたる授業について述べる。

授業では、初めに学習課題（ここでは「めあて」という）「スイミーの気持ちを考えよう。」を提示して、子どもに何を学習するのか知ら

せた。

次に、スイミーのしたことが書いてある文を、「スイミーは（が）」と書かれた言葉を手掛かりにさがさせた。そこからスイミーがマグロをやっつけるために、どんなことを考え、どんな気持ちだったのかペアで話し合い、さらに全体での話し合いにつなげていった。ペアや全体で話すときには、なぜそう思ったのか理由をもとに話すように指導した。

そして、動作化を取り入れて、より状況が理解しやすいようにした。子どもたちは、スイミーや小さい魚たちになりきって、どんな気持ちでマグロに立ち向かっていったのかつぶやきながら活動していた。

最後に、教科書に作成した吹き出しに、スイミーに対する自分の気持ちを書いて授業のまとめとした。子どもたちはまるでスイミーと一緒に活動したかのように、自分の気持ちを書いていった。

## 3. 実践をふりかえって

子どもたちが主人公の行動や気持ちを読み取る様子を毎時間ごと記録にとって、担任に知らせた。記録にはどんな支援をしたときに、子どもたちの活動が活発となり内容を理解していったかを、丁寧に書いた。そして、記録だけにとどまらず授業後に担任と話し合っ、子どもたちの学習の様子を伝えた。それによって、担任がアニモで活用した絵カード等を在籍学級の授業でも活用して、指導に生かしている。

他の授業でもこの手法を生かし、子どもたちの意見を整理したり確認したりするために動作化を取り入れて指導したり、授業が振り返れるように板書にも工夫して、だれもが分かりやすい授業をめざして、指導を工夫している。